

植福

— 国難に備える —



< 念ずれば花ひらく >

秋葉山（新潟）

< 坂村 真民先生 プロフィール >

1909年（明治42年）1月6日、熊本県に生まれる。
8歳の時、父親の急逝によりどん底の生活に落ちる。5人兄弟の長男として母親を助け、幾多の困難と立ち向かう。
昭和6年、神宮皇学館（現皇学館大学）を卒業。
25歳の時、朝鮮にて教職につき、36歳、全州師範学校勤務中に終戦を迎える。
昭和21年から愛媛県で高校の国語教師を勤め65歳で退職、以後詩作に専念する。
四国移住後、一遍上人の信仰に随順して仏教精神を基とした詩の創作に転じる。
詩の愛好者によって建てられる真民詩碑は、日本全国47都道府県に分布、また海外にも及ぶ。人々に「生きるための言葉」をたくさん残され、2006年（平成18年）に97歳で永眠されました。

< 徳真会グループとのかかわり >

1991年（平成3年）の徳真会グループ創業10周年を記念し、新潟市（旧新津市）秋葉山に全国で171番目となる「念ずれば花ひらく」の石碑を設立、寄贈。
当時82歳の坂村真民先生には、遠路四国よりお越しいただき、入魂式を執り行いました。
当グループ代表 松村博史と親交が深く、徳真会グループの医院にも特別に、真民先生の書を飾らせていただいております。
また、その後も代表 松村と坂村真民先生の交流は、晩年まで続いていきました。

先日、ミャンマーでクーデターが起こり、与党 NLD のアウンサン・スー・チー国家顧問をはじめ、与党の主要メンバーが軍により拘束され、軍が力で国家の権力を掌握するという時代に逆行する事件が起こりました。このクーデターの可否はまだ結果として出ていませんが、米欧の民主主義対中国の強権主義の戦いの様相も呈してきています。

かつてスー・チー氏が、民主化運動で政権の代表となった時、「友達は選べるが隣国は選べない」と語りましたが、ミャンマーが直接国境を接する国々（中国、インド、ラオス、タイ、バングラデシュ）の中でも、特に大きなリスクをはらんでいる中国の事を言った言葉です。

事実、ミャンマー軍事政権時代、鉄道やインド洋に面した港等は有事には、中国軍が優先的に使うという契約を結ばされた現実があります。

翻って日本近海に目を向けると、東シナ海、南シナ海における中国の一方的現状変更を含めた近隣諸国への覇権侵略の暴挙は目に余るものがあります。

世界中を混乱と不幸の連鎖を引き起こして未だ、その終息が見えない中国武漢発のコロナ感染拡大は今日、世界各国の最優先解決課題となっていますが、この問題に割かれた心理的不安、社会混乱、経済的ダメージ、そして、不幸にして亡くなった人々の命の代償は膨大なものとなっています。

世界中が、これまで蓄積してきたあらゆるものを消費し続けている状態で、表現を変えると今日まで積み上げてきた「惜福※②」の「福」を消耗している状態ではないでしょうか。

確かに今、世界の最優先の課題はこのコロナ感染拡大を終息させる事に有りますが、並行して、コロナ後の世界への対応の準備も行っておく必要が極めて重要だと考えます。

幸田露伴（1867年－1947年）はその著書「努力論※①」で「植福※③」の重要性を説いています。

今日の日本は、過去の先人たちの努力で蓄積してきた平和や、豊かさを「惜福」しながら積み上げる事も無く、むしろ浪費し続けてきた結果、国家財政の悪化、日本人の精神的退廃等、迫りくる隣国のリスクに対しての備えも無くつつあります。

今、我々は、個々人の努力により、日本を強い国家に再生するべく、奮起する必要性を強く感じています。

徳真会グループは、1992年から30年近く中国で歯科医療の発展にも大きく貢献しました。

また、ミャンマーでも歯科技工のデザインセンターを2015年より立ち上げていて、これらの国の状況や国民性も良くわかっている組織だと思います。

こうした事業展開の目的は、それぞれの国への国際貢献もありますが、祖国日本の為に国家依存型から貢献型の組織を創造する為の挑戦でもありました。

「管を以て天を窺い、錐を以て地を刺す」（細い管の穴から天をのぞいたものが天と思い、短い錐で大地を掘ったと思込む様な狭い見識）という言葉があります。

我々は偏った情報を鵜呑みにせず、世界の動向を良く観て、また、中長期的に本質を考え、ポストコロナの時代への準備を行いつつ、このコロナ禍を乗り切りたいものです。

徳真会グループ
代表 松村博史

< 福 >

幸田 露伴著「努力論」※①

1. 有福：先祖のおかげで生まれながらもらった福で、評価すべきところはない
2. 惜福：福を大切に使い切らずに蓄積してゆく
※② この種の人は少し尊敬して良い
3. 分福：蓄積した福を周りにも還元してゆく
この種の人は尊敬して良い
4. 植福：十年百年先を見て世の為人の為に福を育ててゆく
※③ この種の人は最も敬愛するべし

【参照】福：社会に役立つ、人財力、技術、知財、財力等

幸田 露伴（1867年－1947年）

小説家、江戸下谷生まれ。
国立電信修技学校を卒業し、電信技手として北海道へ赴任するが、文学に目覚めて帰京、文筆を始める。
1891～1892年の「五重塔」等で小説家としての地位を不動のものとし、尾崎紅葉とともに「紅露時代」を築く。1908年からは京都帝国大学で国文学を講じ、1937年には第一回文化勲章を受章する。漢文学・日本古典に通じ、多くの史伝、考証、随筆を残した。